

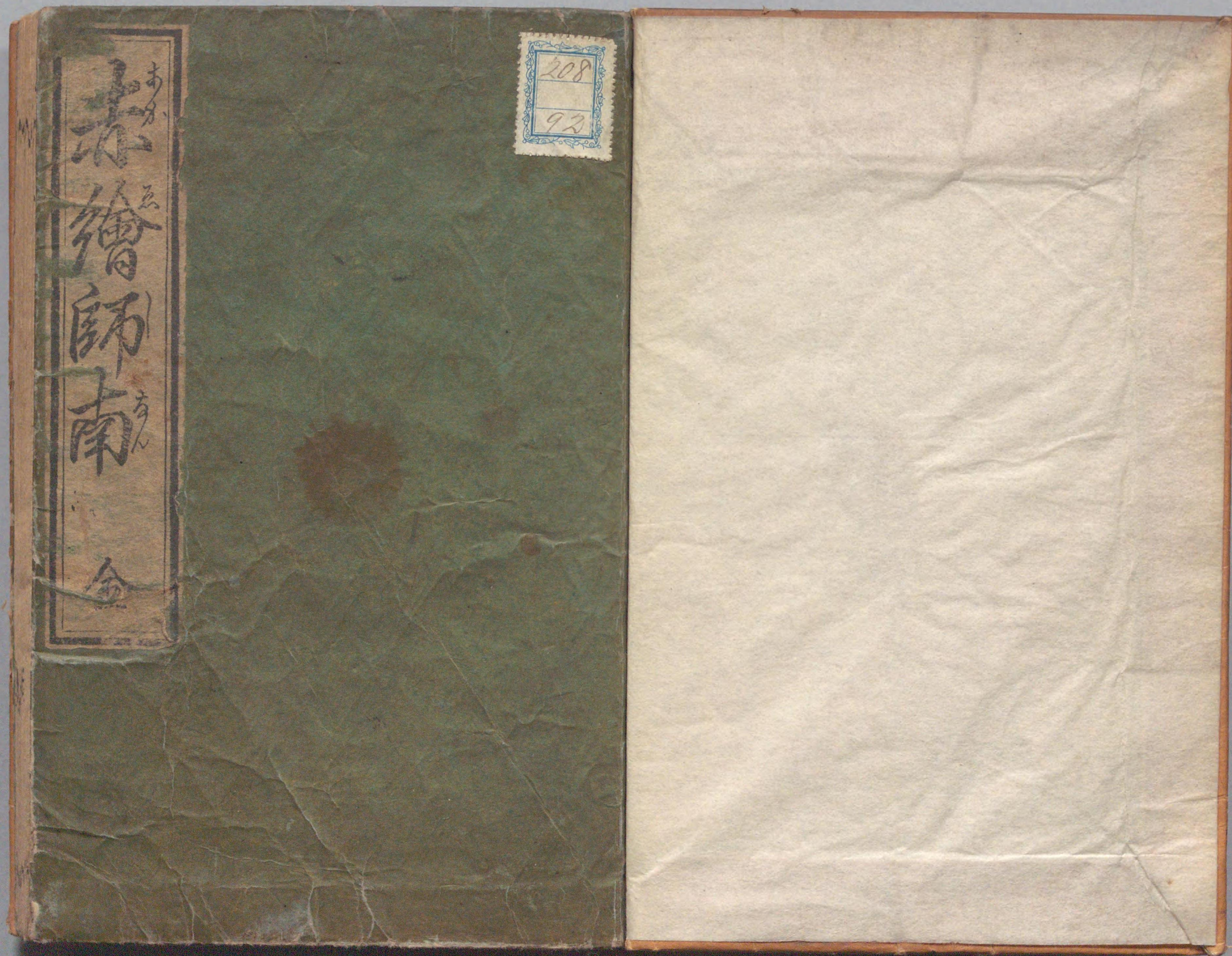
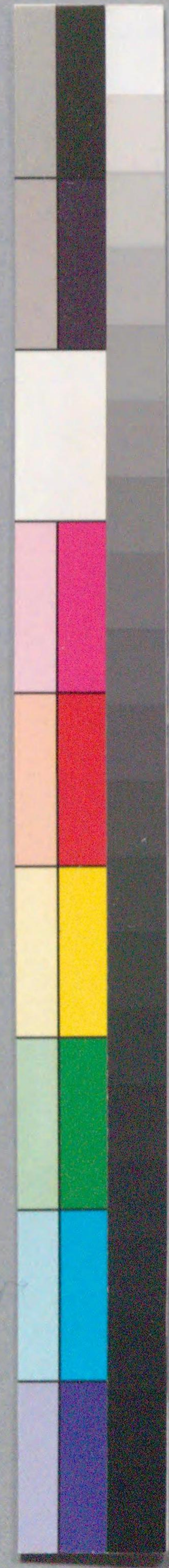
208  
92

国立国会図書館 赤絵指南 208-92



ガラス使用





国立国会図書館 赤絵指南 208-92

ガラス使用





自序

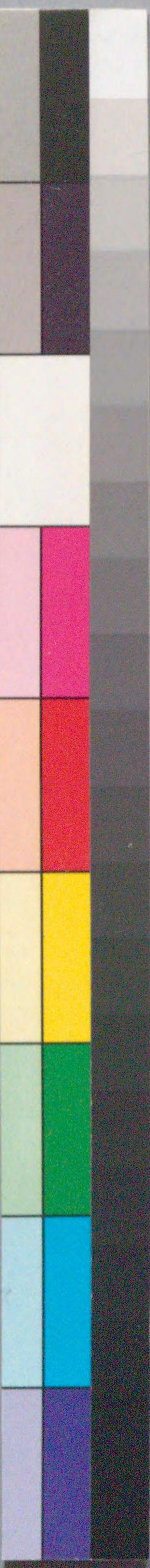
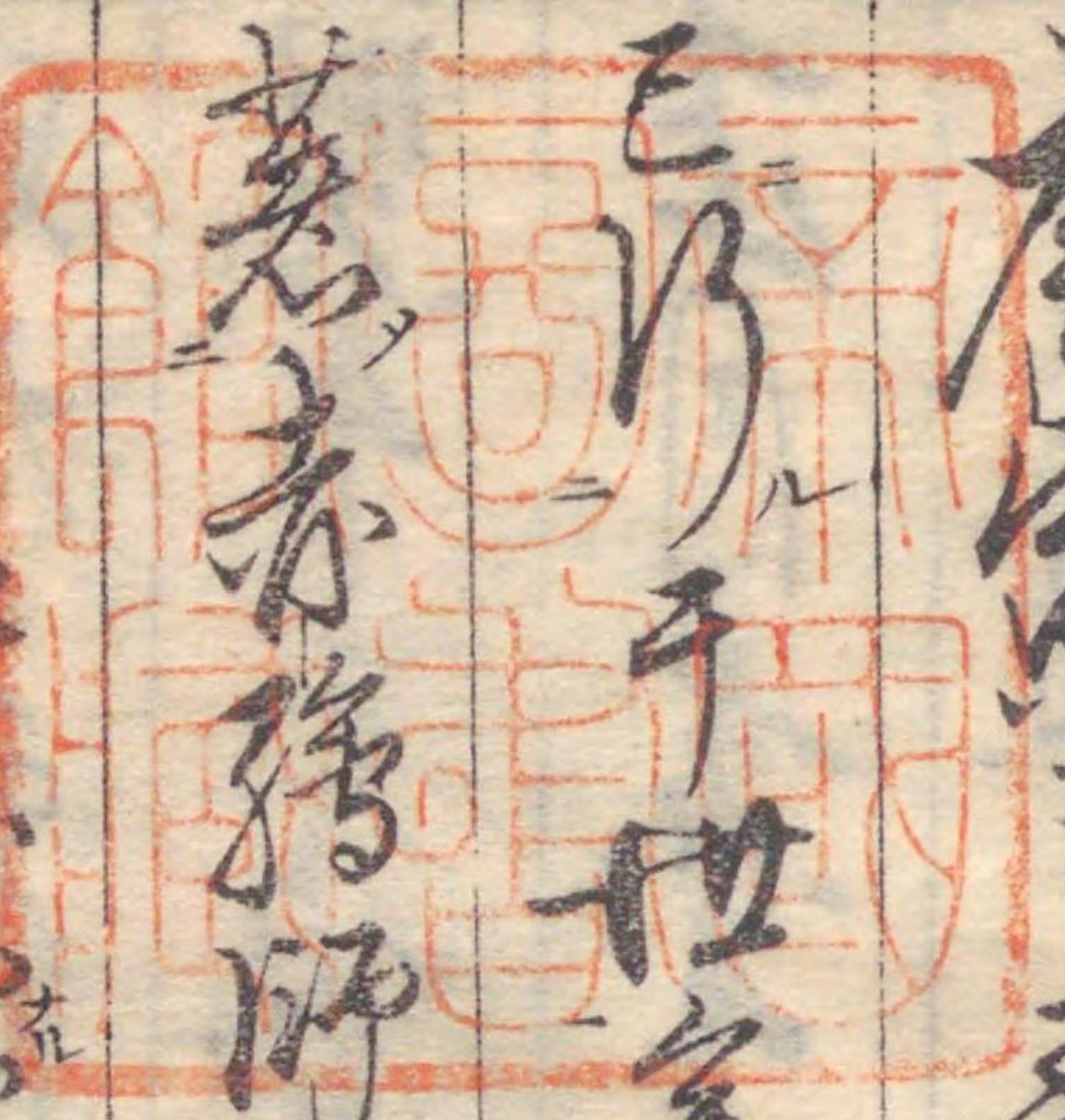
廣海之表予著字物藝古

已行于世矣比茲又因書肆之

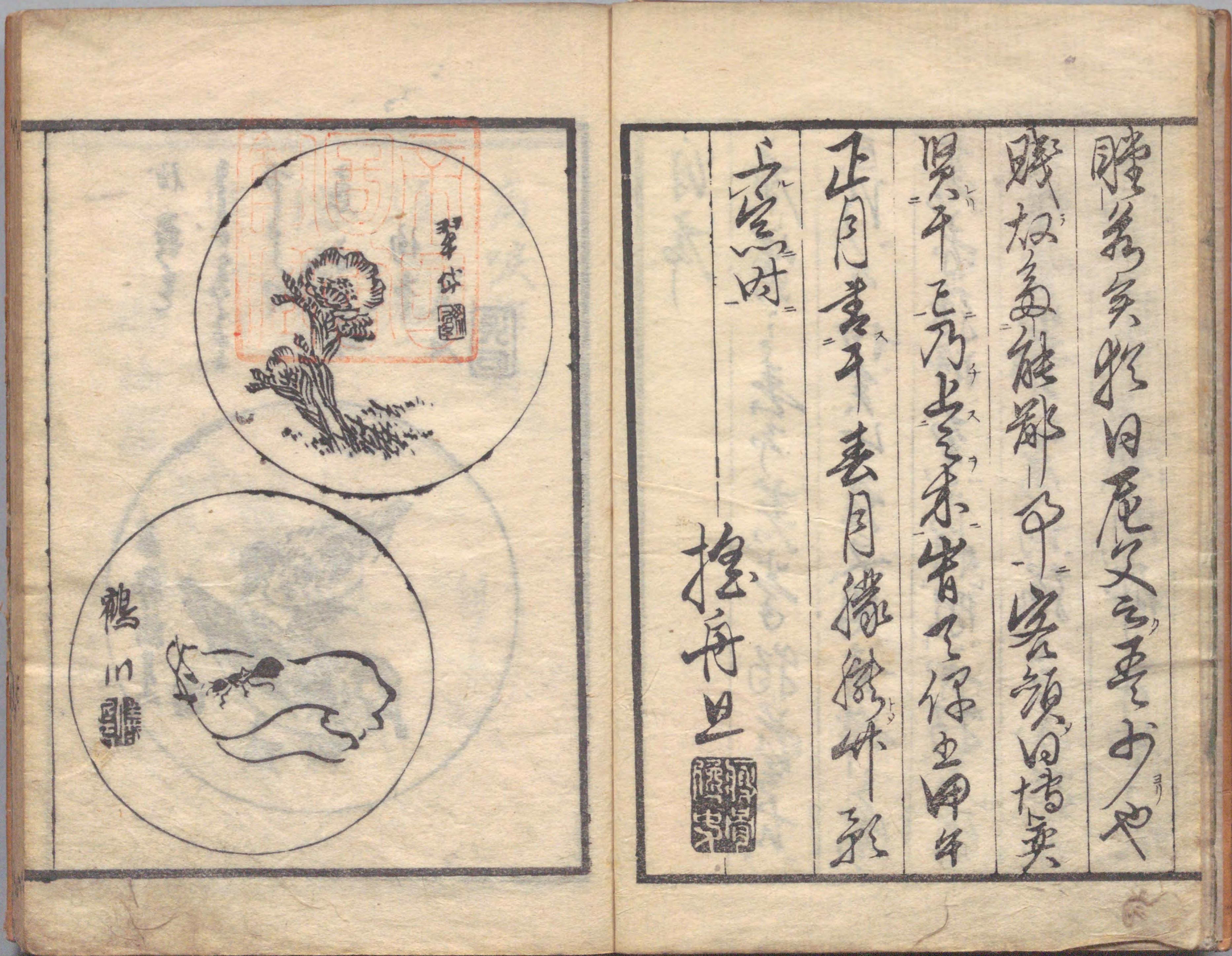
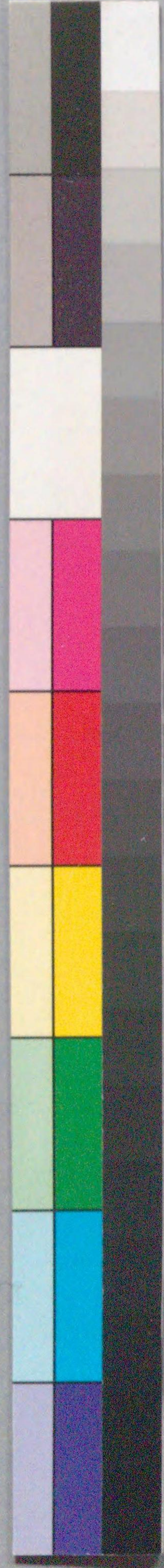
著者將所著之將形之形乃

曰唱呼里引屬均錄之之小技而

跡<sup>子</sup>字<sup>子</sup>采之機調也







正  
月  
廿  
一

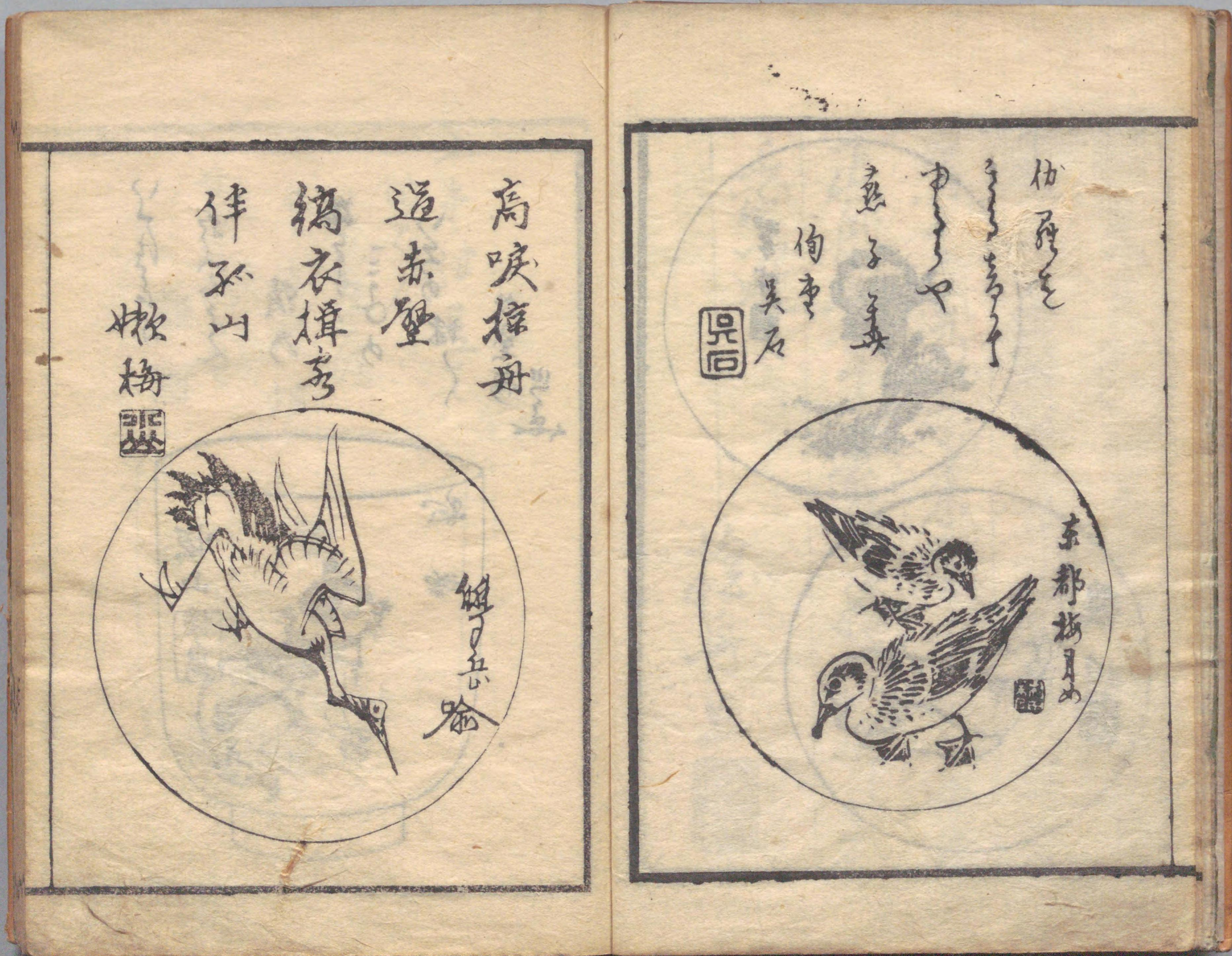
松  
舟  
旦



贈為矣於日危又云其少也  
賤叔多能都一中空顏曰惜矣  
吳平正乃出氣未肯之得也甲午  
正月廿一 春月松舟作於







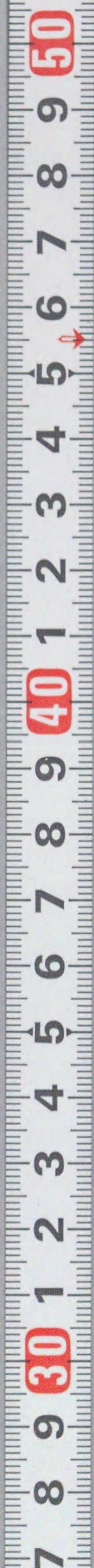
高吟標舟  
道赤壁  
縞衣楫客  
伴孤山  
懶梅



仙居  
中々や  
燕子  
何事  
吳石









7 8 9 **30** 1 2 3 4 5 6 7 8 9 **40** 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 **50**

九千羊  
 ちのち齡也  
 壽萬と  
 ひきつみ  
 はなを人の  
 おろみき  
 報籍

あき  
 白く  
 萬の  
 額  
 白く



采之致

為贈付

人乞

同心



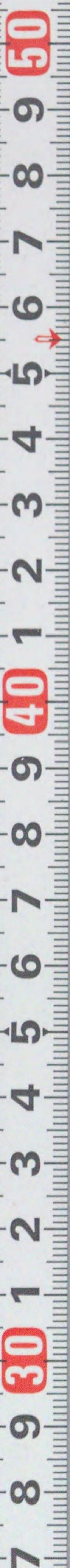
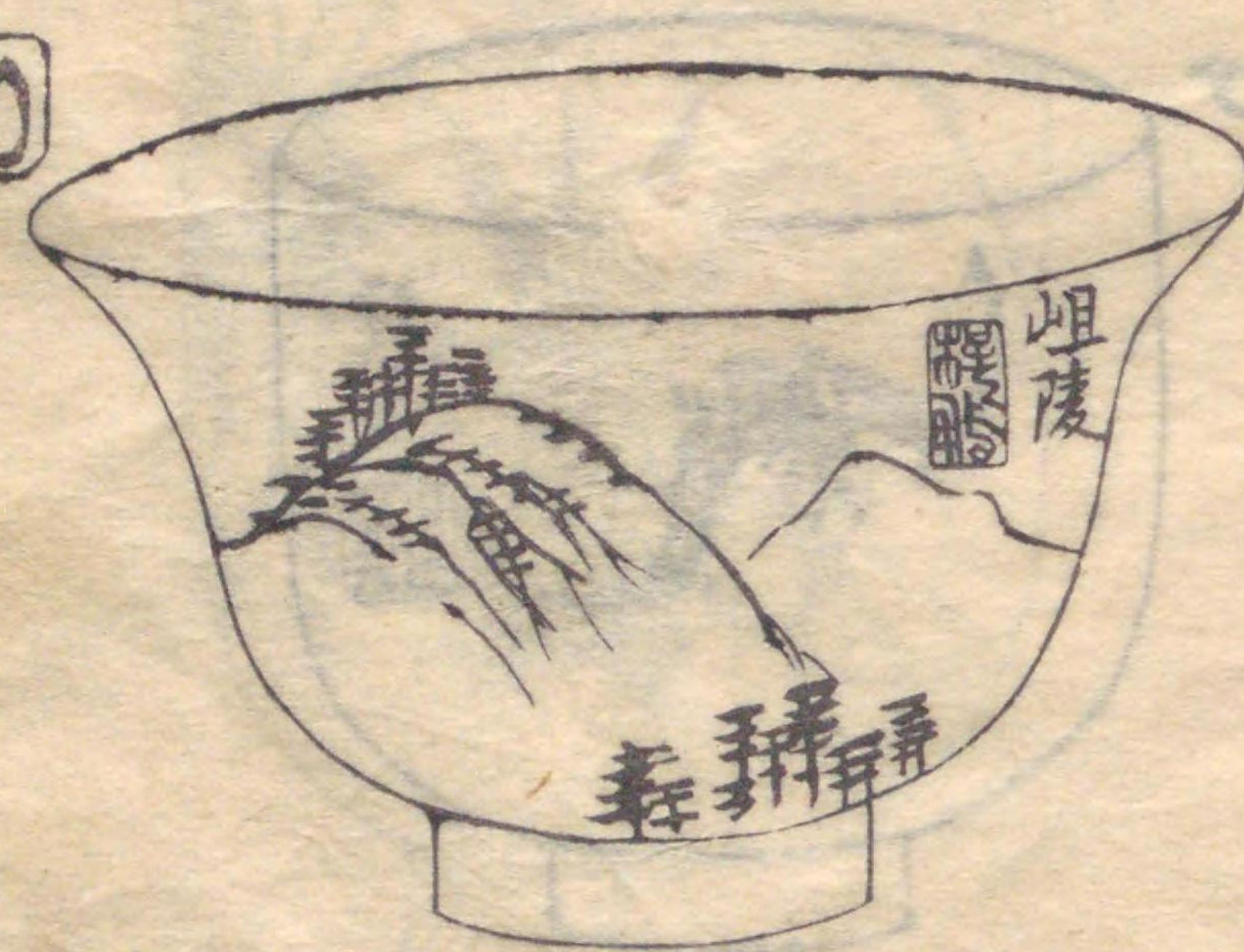
海思看

鳳舞

山勢似

龍眠

之龍畫





沈監偷香典  
 録年百廿業  
 裡日回紫展之  
 世上人心陰尾  
 刺口甜不粘鄉

半仙額

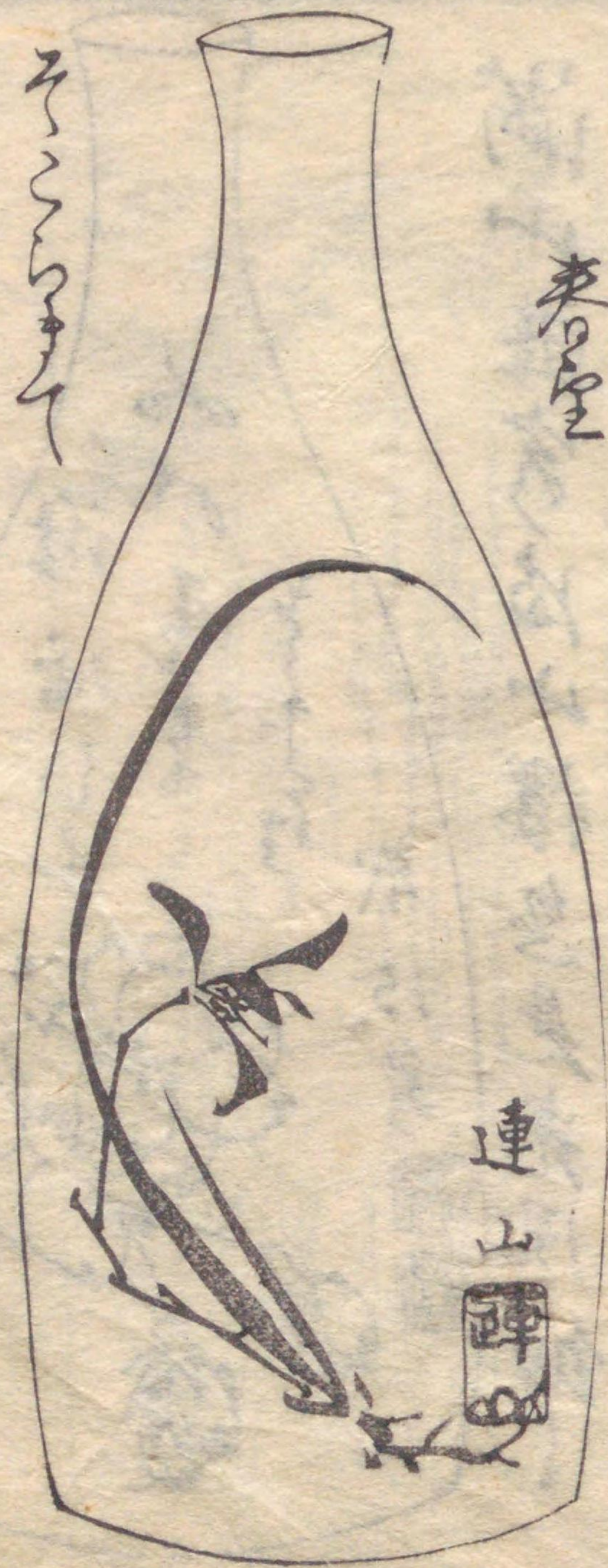
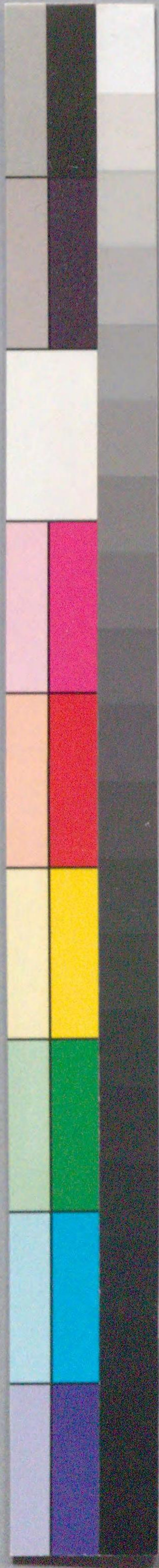


かく厚り此  
 花より中  
 彩々  
 月の風乃  
 中々々々々

便欄基  
 義法師  
 美







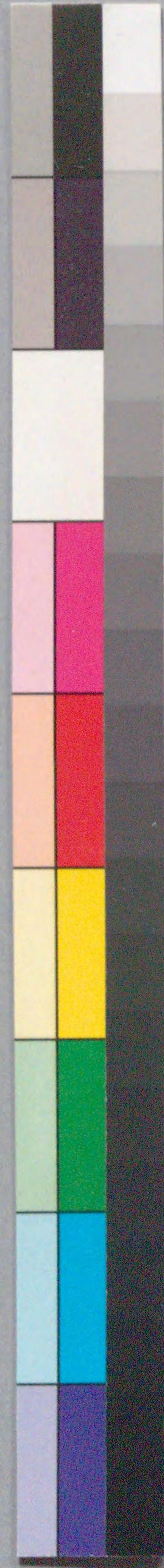
そのくわん  
ちふま  
出ん  
美のふ  
丁卯

山権  
如裂

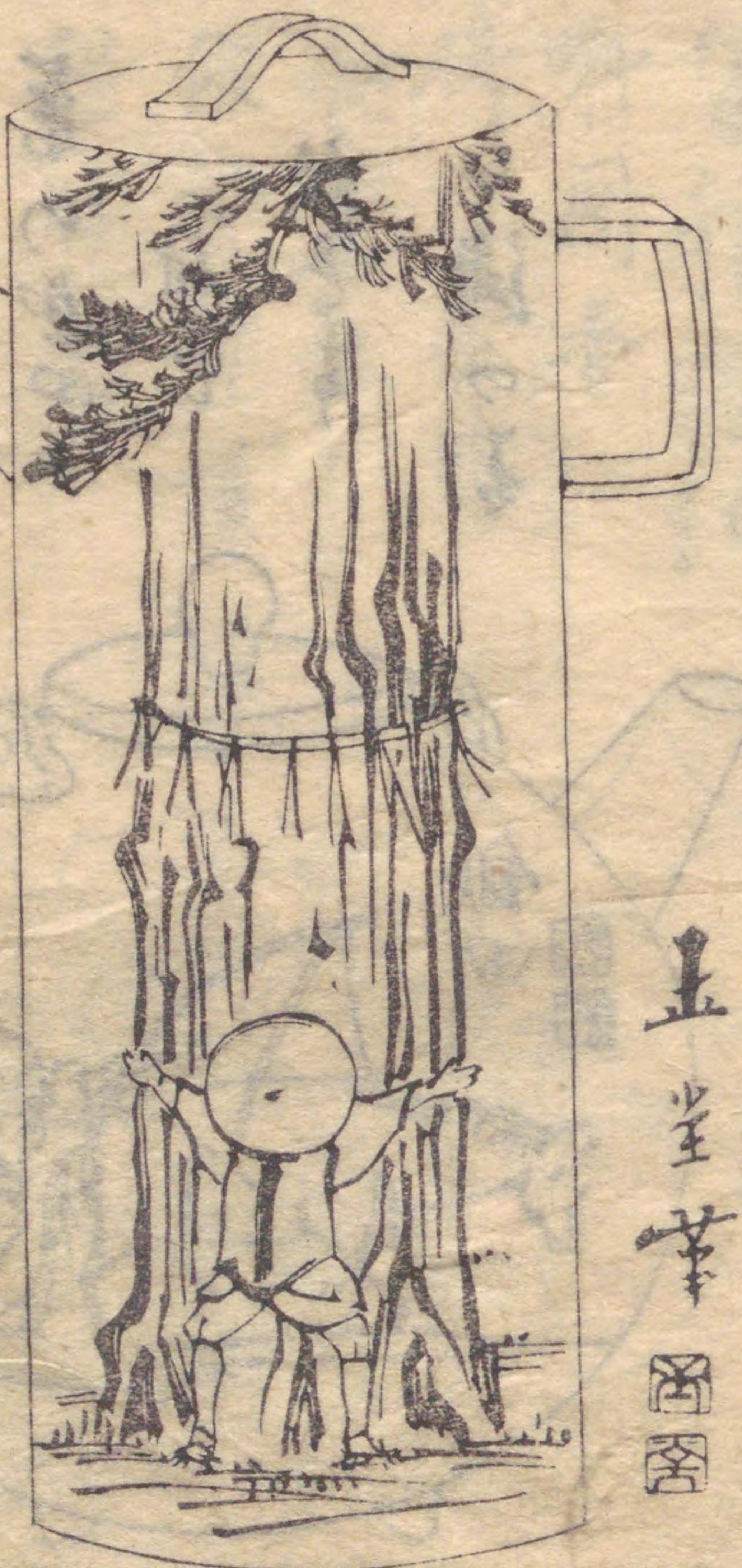
龍年逸士  
同







此世之世無  
 之歸の心  
 心  
 心  
 心



土堂筆  
 印

滿山遊客滿山櫻  
 忽見光風細  
 生一片萬葉千片  
 散春深恰如香  
 半



飛鳥山  
 看花

清嘉祥  
 印





等雅程紅  
 嘯團香  
 倚風含態  
 映扃牀  
 銀袴時樣  
 穠勝色  
 爭芳自炫  
 芳碎粧

順軒



茶の壺や

村と

放りて

海の音

千嶂

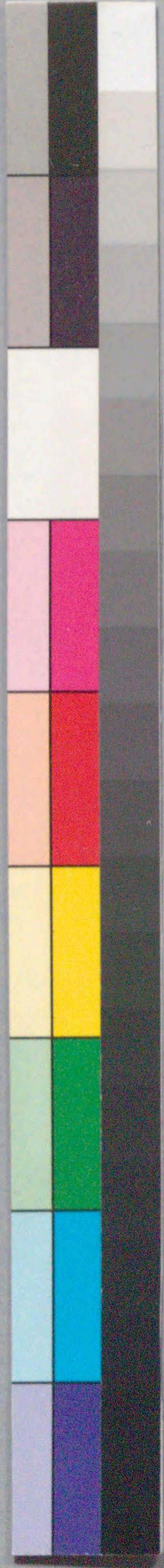




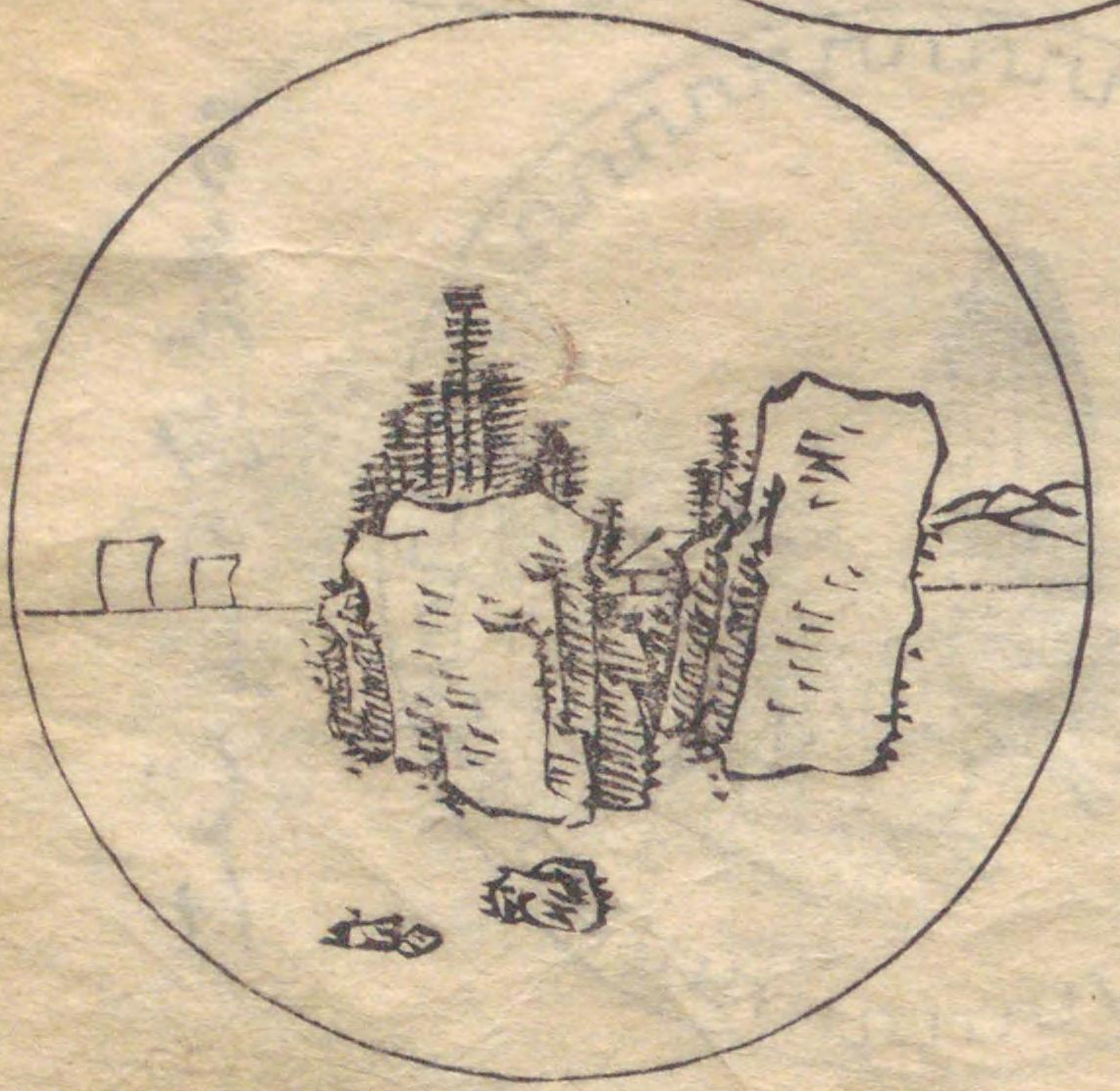
刻  
年  
身  
年  
利  
生





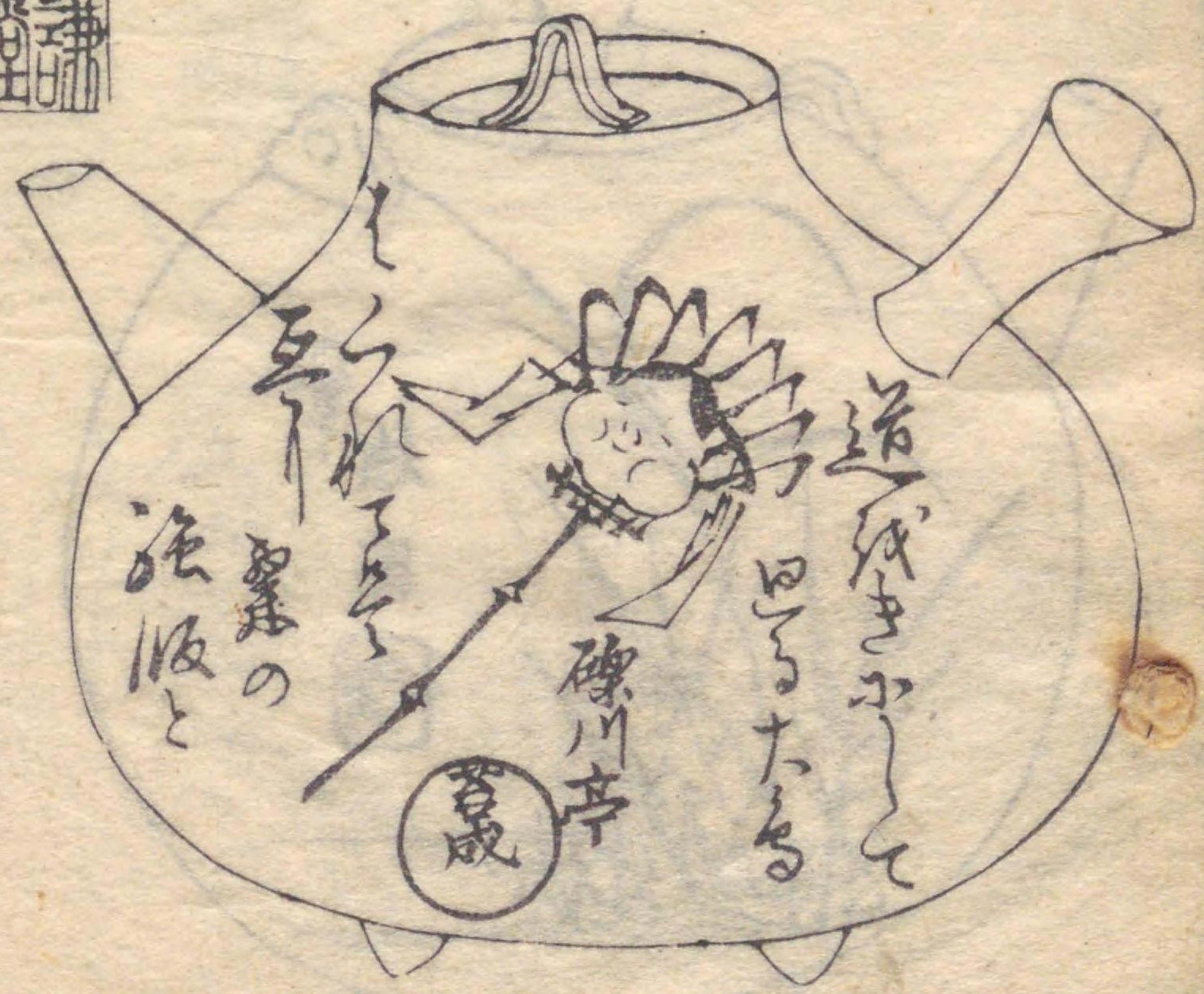


すゝめ  
水仙



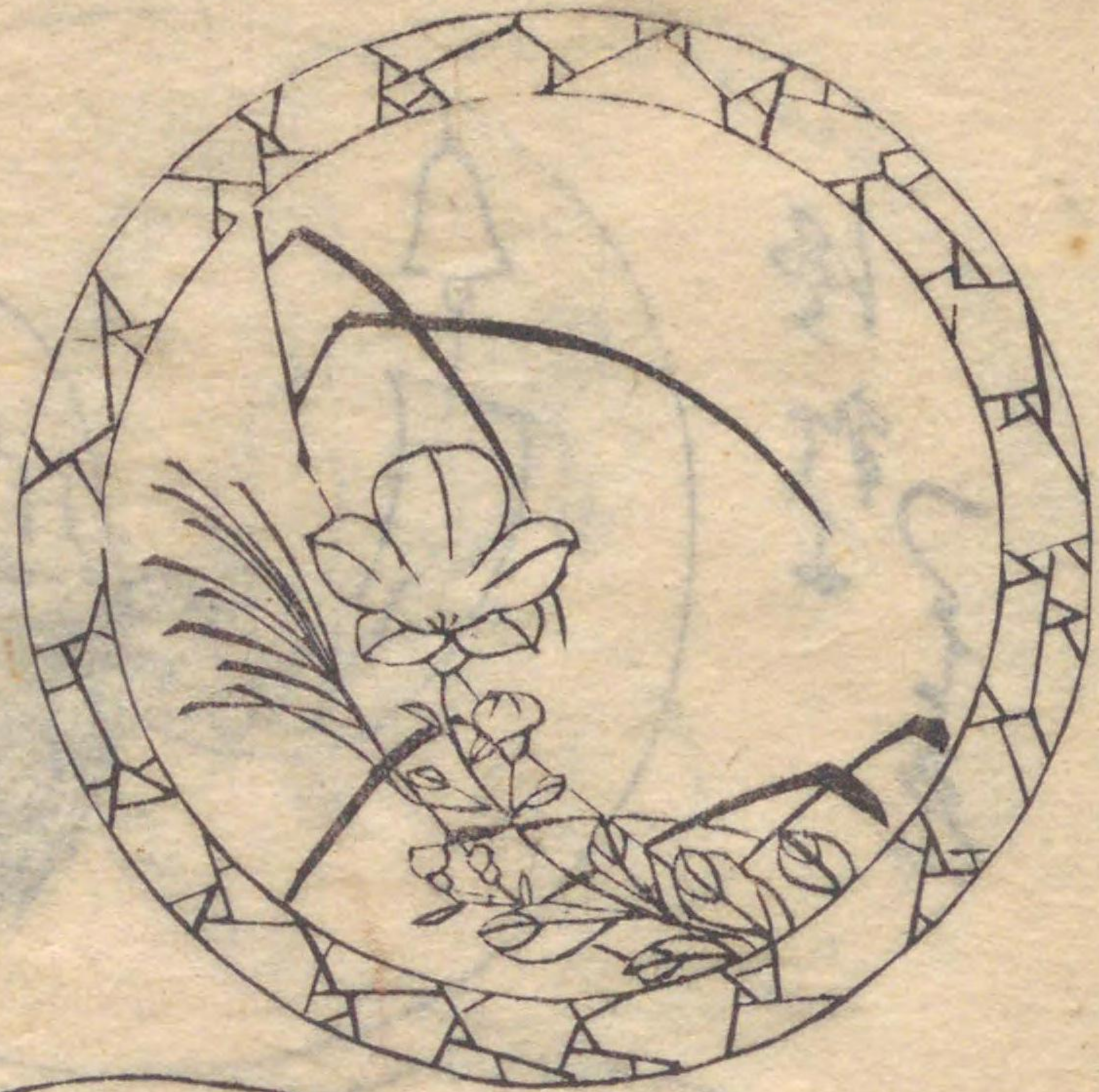
石  
山

花  
月  
亦是  
亦是  
松丘  
龍鼻門人

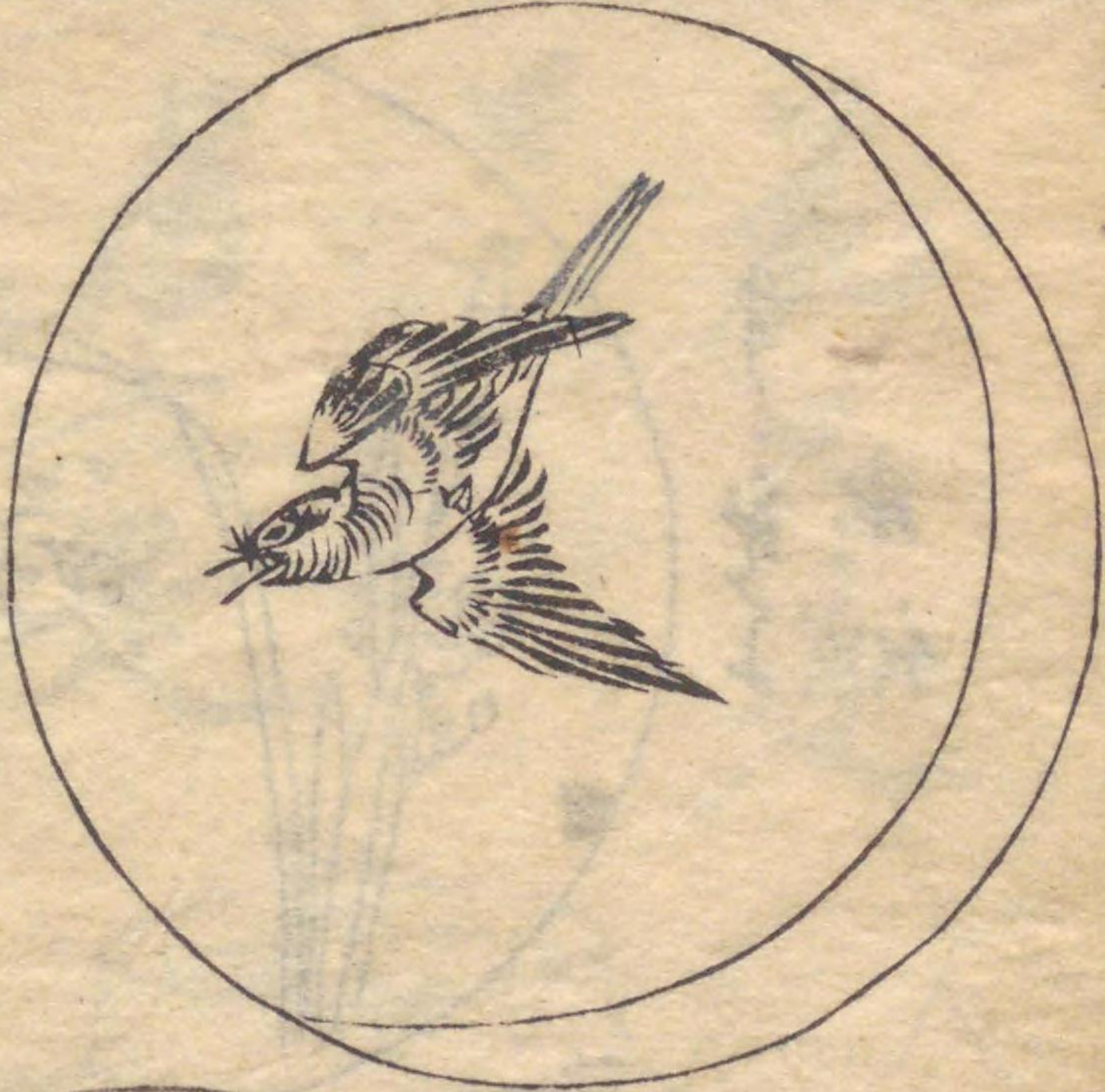




芒子  
接子



月小  
時多



早乙女



うき山のおむけ

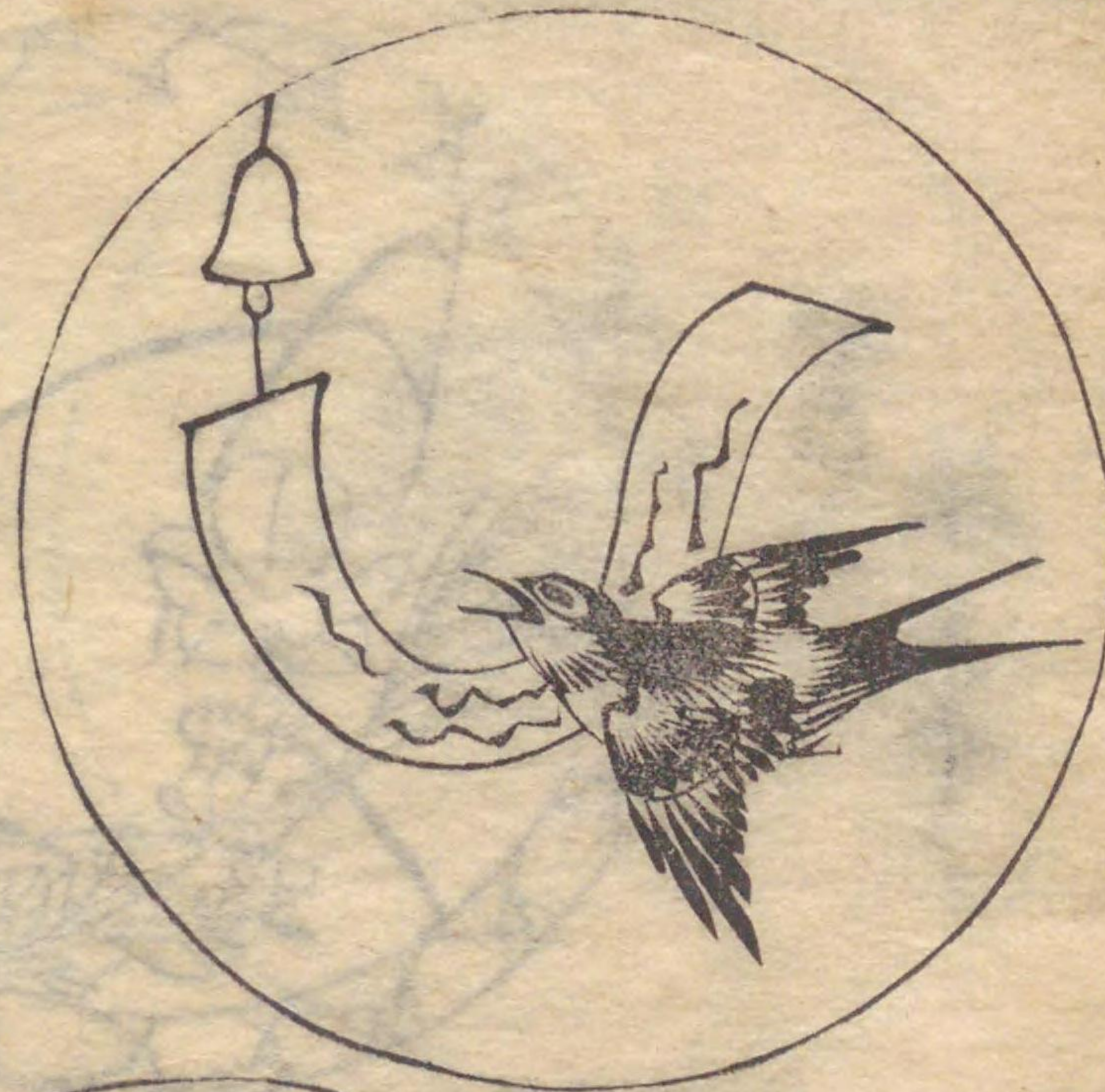




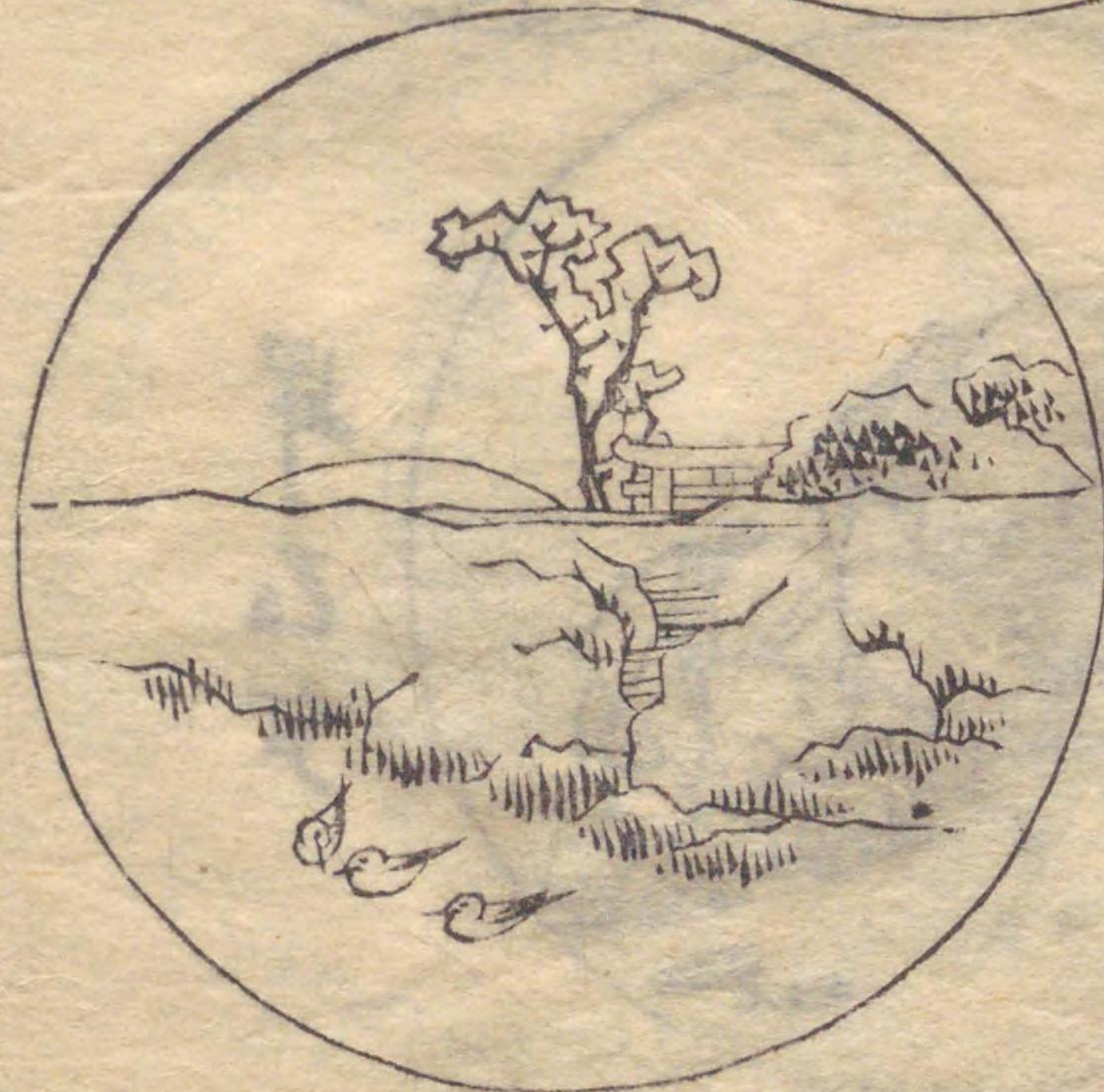
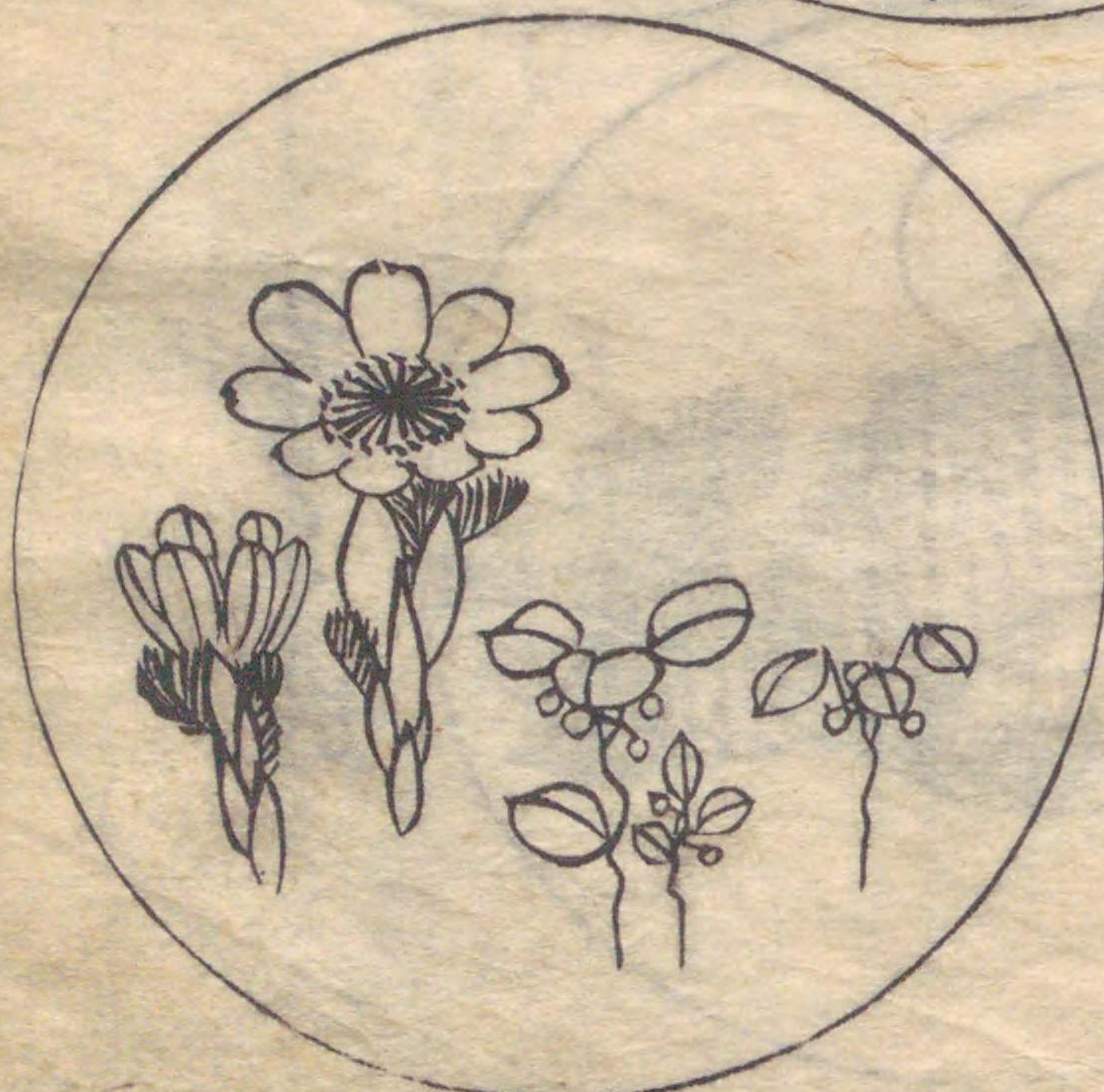
亀



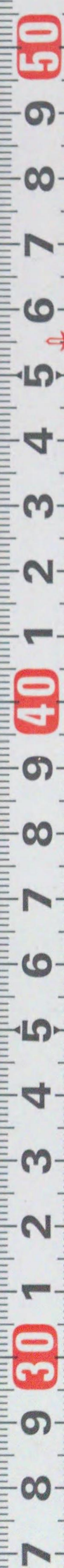
酒  
籠  
子  
つ  
と  
免



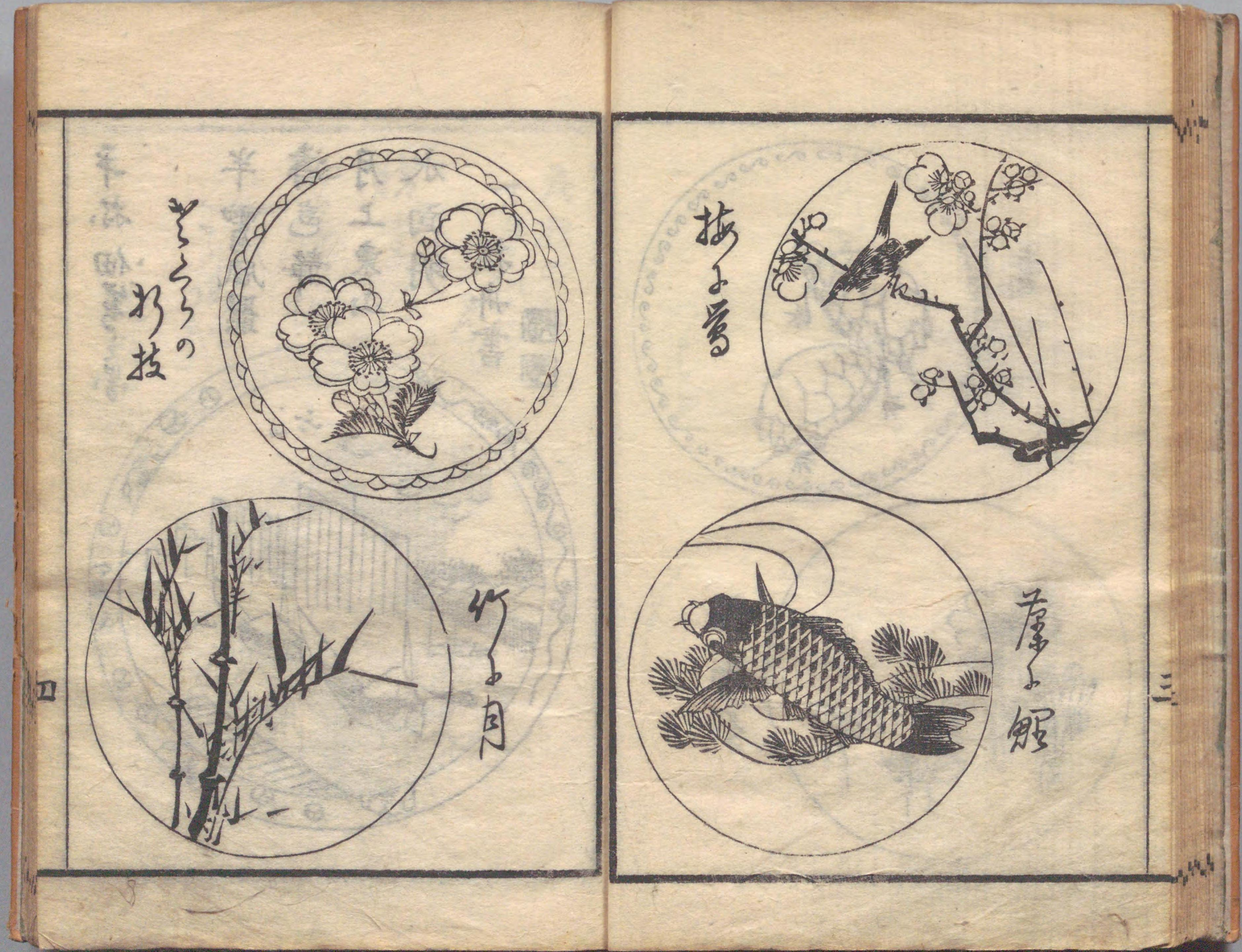
福  
寿  
草



山  
女  
の  
山  
車









平杯佃家之景

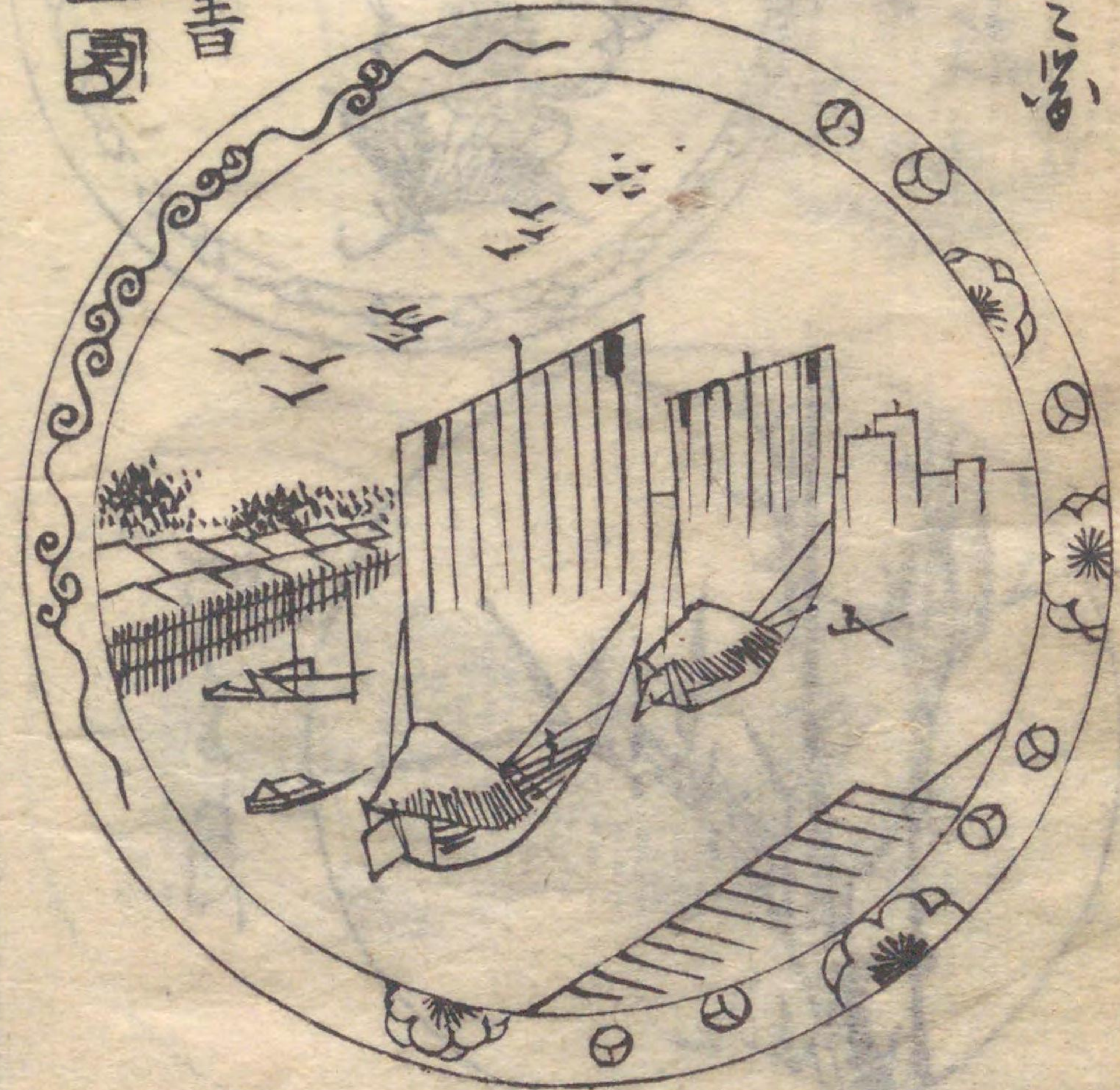
半霄風罨

濤色静

月上東山

水面明

揺舟書



花枝の草ん

すまじしを

あそび

娘書あり

あそび

あそび

あそび

湖月



下

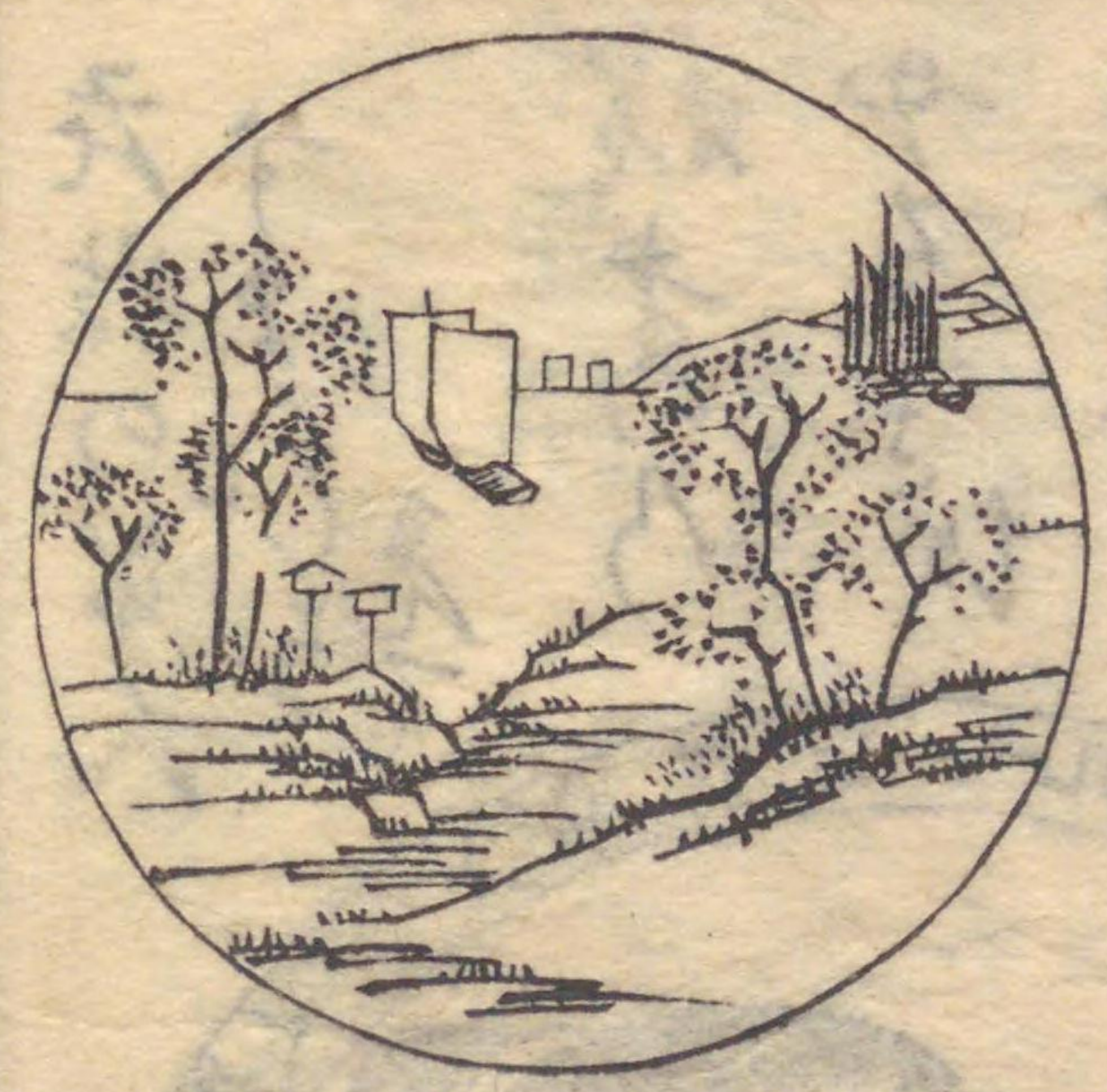
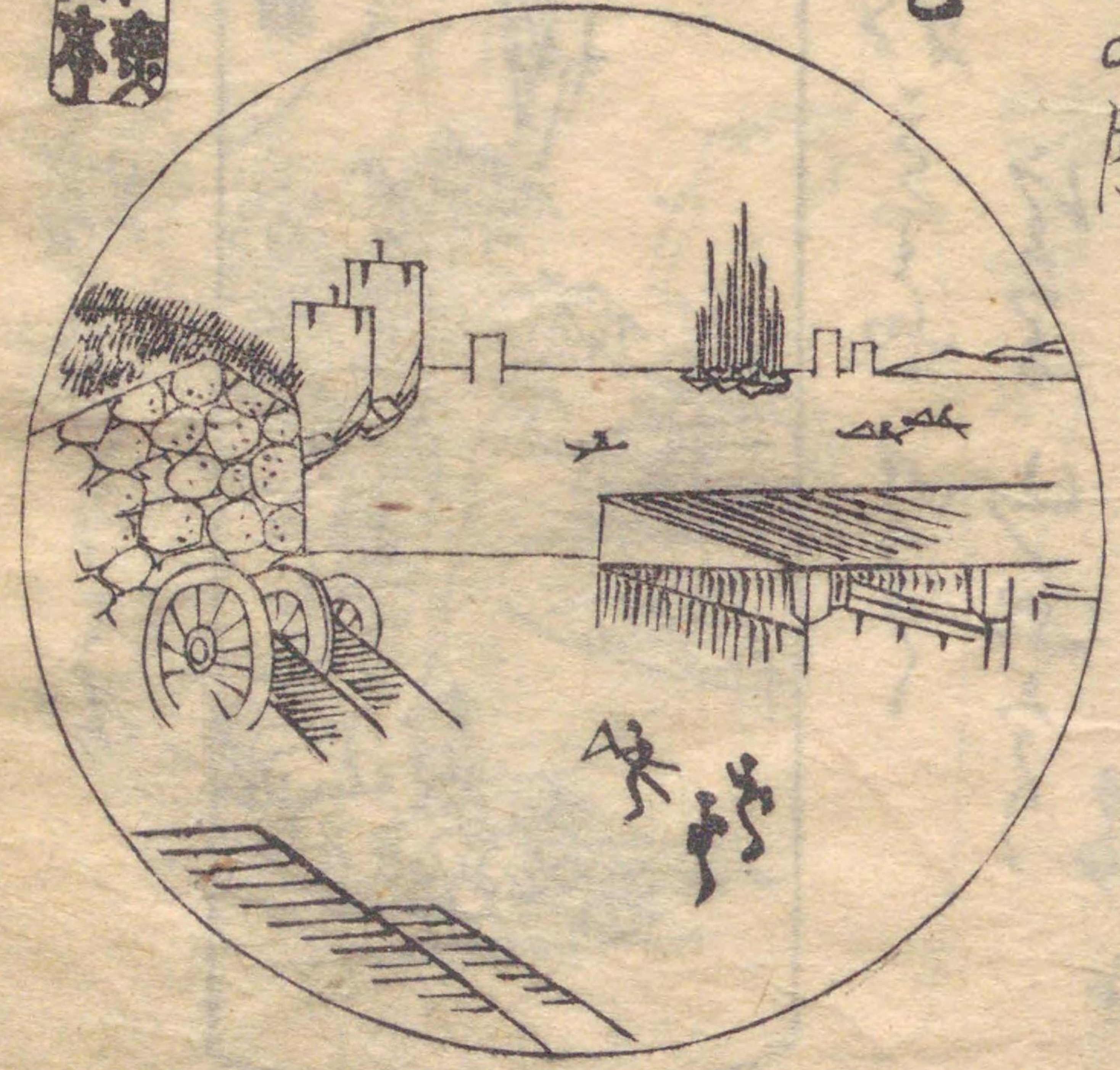
上







下高橋の月  
 貴浪月也  
 唐物口  
 携妓表飯  
 牛河江  
 招子題

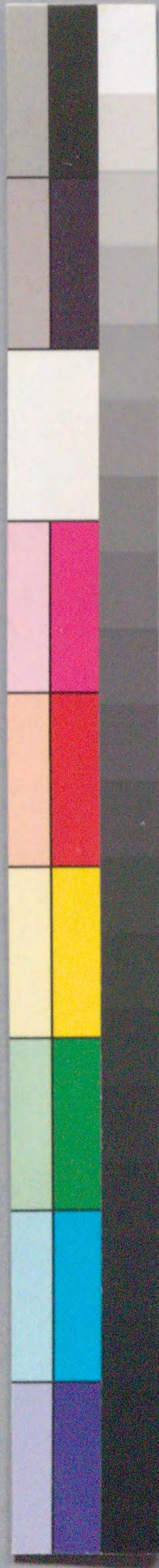


上月を寺担杯の雪  
 上中殿山の花

中梅莊の雪



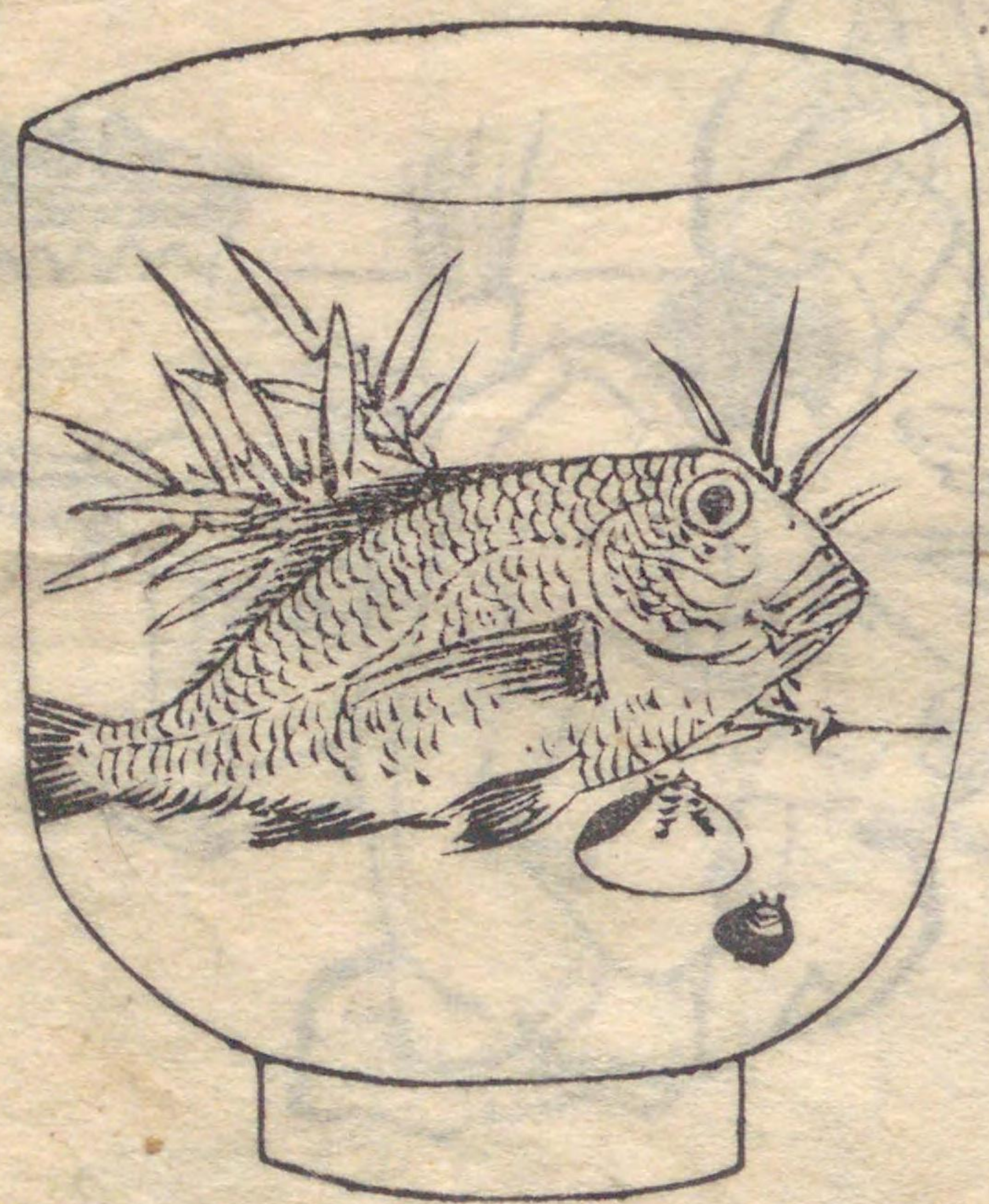








見る子  
 ちまき  
 けさ  
 鯛  
 ほう



大湯のこゝろ

小湯のこゝろ  
 ちまき  
 つゆのはり  
 さくら  
 みやこ  
 さくら  
 さくら  
 さくら



梅子





描杯中  
赤繪之  
圖

赤毛の子  
樂ん  
正月夜  
抱酒堂  
三母



さかいるく  
さかいるく  
さかいるく  
さかいるく  
さかいるく

山毛子  
穢子堂  
正月







少くも  
 さけ  
 表  
 傲  
 子  
 人  
 了  
 保  
 甲  
 午  
 表  
 採  
 子



常  
 定  
 貫  
 兩  
 直  
 燒  
 贈  
 太  
 白  
 杯  
 平  
 巾  
 け  
 乃  
 の  
 名  
 境  
 子  
 入  
 り  
 れ  
 也





目錄

繪之具制法之圖

ニウホウ之圖

黒藥之法

蒼藥之法

紺青藥之法

黄藥之法

紫藥之法

光澤藥之法

光澤置揚藥之法

光澤無置揚藥法

赤藥之法

水晶ニウ棒之圖

草色大赭之法

金箔解法 并ニ圖

金口鑄懸之法 并ニ圖

釜燒方 并ニ圖

以上

赤繪師南

凡赤繪を施すに先んと思は先調合の  
 茶の湯之具を練りまじへりて  
 極細糸より其の後に茶を  
 練り入りてひきまじへりて  
 練りまじへりて先彫戸物に  
 塗らるるに先んて  
 茶の湯に先んて



茶のごしき  
 志す茶を  
 こまにべし  
 茶挽ハあつ  
 どの茶  
 とし

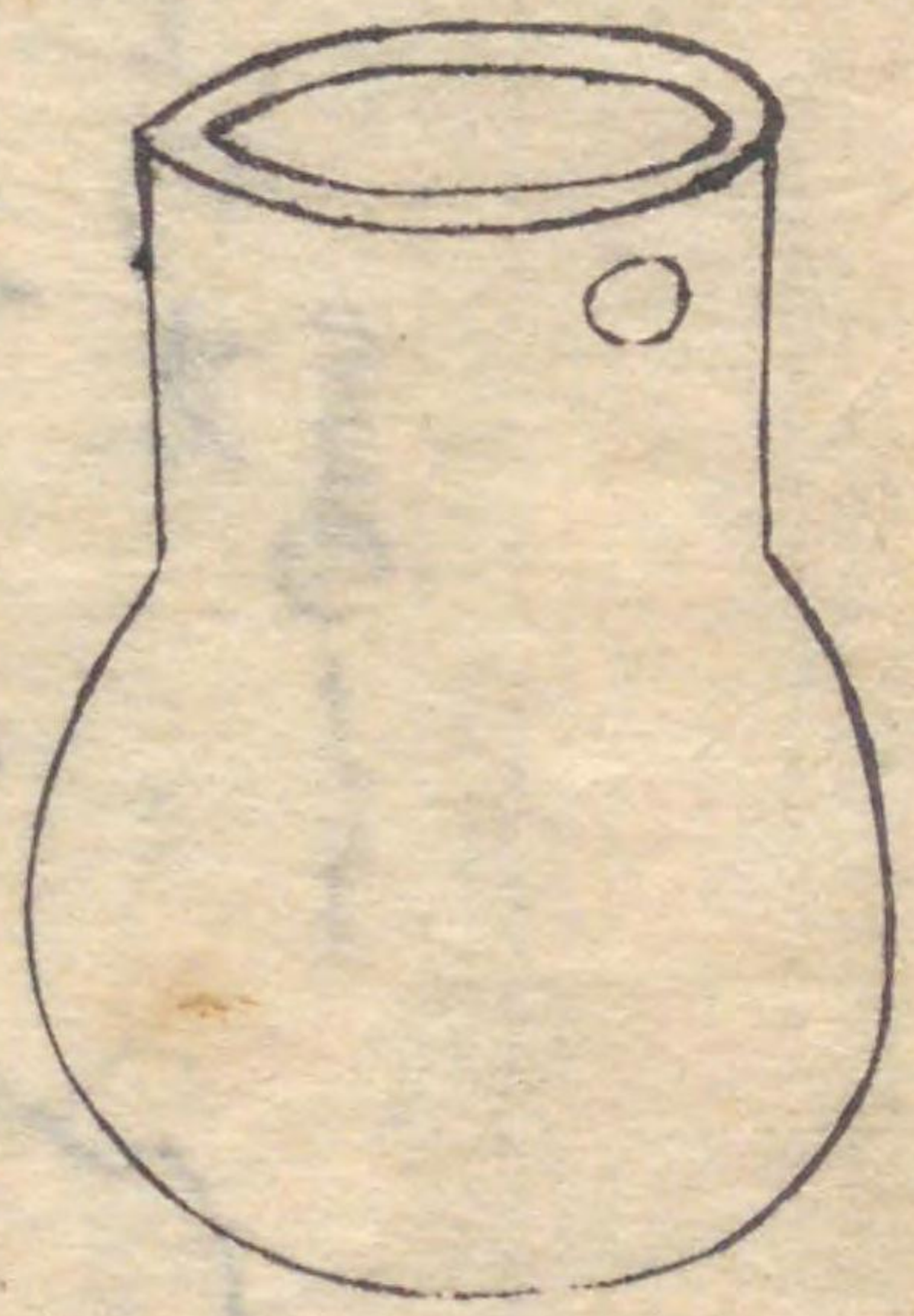


梅庵抄

なる事茶はさきと煎戸抽は出らば多  
 務と具を物ごの先ましく引く甘々  
 こしよのけむをこれよりゆるぎを細  
 雅美子ち里た子務の具の物製法の  
 留をさしと拵べし  
 ○ 務と具製法の事  
 茶ありてはうの事







これハ、あうほうと云て  
 せう極屋子ある里是  
 急来もくも竹もも極  
 を作りけて用也あり  
 焼ハ極茶あり

○ 勝之具茶法秘傳

茶法ハ極秘傳子志之容易子人子志  
 ら志もてさうわらね凡予山ふその奥  
 儀をさうくく志るしと初茶の存子人

○ 黒茶

一 考 吳 酒

勝之具屋子あり

七分

一 志 玉

日

六分

一 度 の 七

七

七分

右 三 種

造六井上茶の志ね市がよう

水

を 入 る 又 能 搗 り 極 細 茶 子 成 する 時 糶

各 種 入 る 茶 子 一

三





○ 蒼茶 あざくすり

一 唐の七

二 每五分

一 緑茶

七分

一 日の思

振あうーとまがらうー

六分

一 志ら玉

是に於けるの類あり

二分

右の四種をそのおとく製し各を入  
るす又そのをいりてまぜて一をトロリと

するくろくまをいりて新まぐらうー

他一茶をいりておはなをいりて

るうをいりて茶先のまわらぬよ

あまぶるあぬるーとまぐらうー

新色の時下の思がまぐらうに拍あま

ずんぬんをいりてぬえー

○ 緋茶 ひさ

一〇







一 毛毘書

毛毘

一 毛ら玉

日

一 度の七

武分

右物衣あて方あて蒼菜あそのゆくぶの里をみく  
トロリと解とろて糸色いとべへ焼やああううと  
な色なをああららららちちり

○ 黄芽

一 度どの七

武分

一 度ど白しろ同どう

六分六分

一 白しろ玉たま

五分六分

右物衣あて方あて蒼菜あそのゆくぶの里をみく

○ 世志茶

一 世志茶

五分

一 日ひの七

七分

五





一 唐の七

七分

一 三つ玉

五分

右中子おあし

○ 光匠茶

茶を運ぶの止ぬりて  
姉をうきまぬりて  
かくつやづらあり

一 唐の七

五分

一 緑考

七分

一 日のおり

七分

一 白玉

五分

右中子おあし

○ 光匠茶

一 白玉

五分

一 三つ玉

五分

一 日のおり

五分



たやうにおおなま

○ 老匠 草堂 揚

一 しろ玉

しろ玉

一 唐の玉

唐玉

一 日の玉

日玉

一 伝楽玉

伝楽玉

たすおのおあ

○ 赤子系

一 年 柄

年柄

一 唐の玉

唐玉

一 白玉

白玉

一 日の玉

日玉

右はハ系系と解方同く膠多して現  
ふのまハハ系べのうに

七

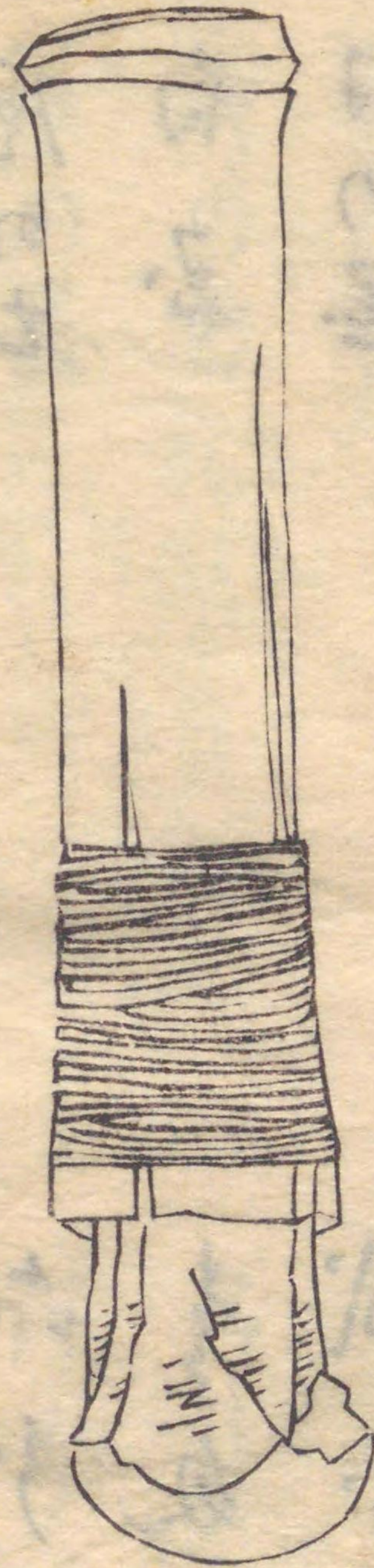




○ 赤茶、製法水晶ろう何うの茶



あせうの茶を丸くすう  
て又茶のごとく竹ます  
けく用也べー



赤茶ハハニまおある、俵いざんあやまこのきんようかく摺  
ハいなく摺まうまひすうもぐく茶こヤもらる

こいらうぐつるくこれあらうまものあま晶せいをもち

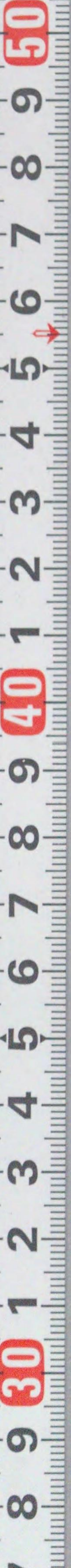
○ 茶色

是ハあ茶さとあ茶さとあ茶さとあ茶さをあ合あせせてもち

○ 大志茶

是ハあ赤あ茶あとあ茶あとあ茶あとあ茶あをあ合あせせてもち

○ 金心御祥い法い茶い





掌のあそく  
 一まづくぐり  
 中指の先を  
 志すもべ  
 志すをそく  
 すべ

大塚宮  
 剛



全の海ハそそこそ  
 丸の海のあち  
 藤しをそ買  
 べし目方ま  
 包もそ大我  
 四指同位や  
 ○如若中指  
 まそそんべ

松舟白雲









産出のついで



嘯月  
嘯月

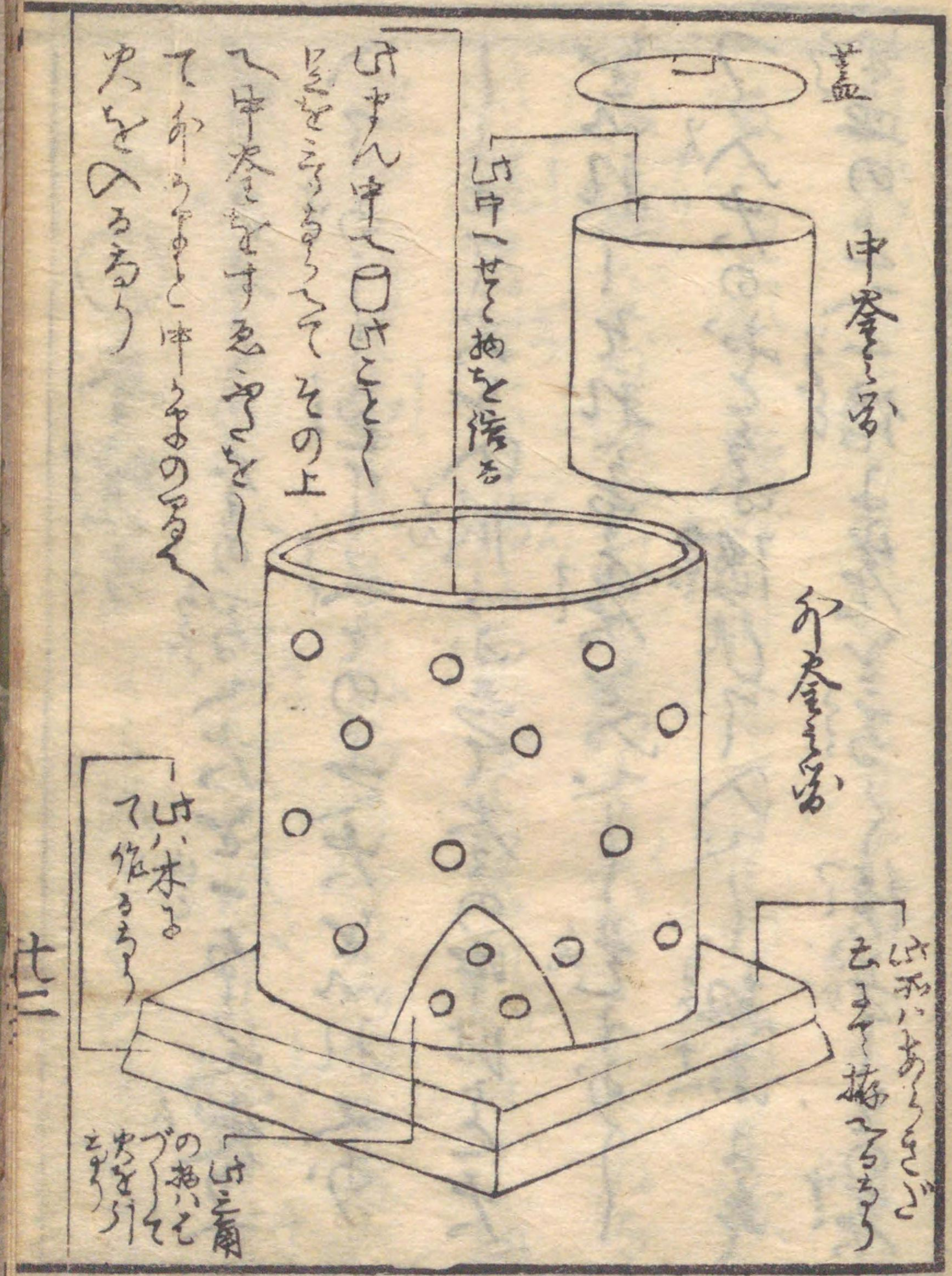
てしるも友もむじきくははあうの金の  
めんどうのころあつたねえの移し金の  
あを一枚主八細末の金あつてく沈ま  
ちりその時上あをまると持改二月も中  
授のあつたあをいれてさへ二月も中  
他二月も中あつたあをいれてさへ二月も中  
あつたあをいれてさへ二月も中





金は心つうけは  
 杯のふちへ心つうけを焼付んとちるは先  
 杯を火の上まゝに焼あざうらつく成る  
 時手よえち金等まゝ杯のふちを焼くぬ  
 るべし火よあざうらされば金が内へ流れて  
 ちかなく成る

○金釜の事



けせん中一〇五  
 中釜の事  
 外釜の事  
 火をひるちり

廿三





○ 釜焼方

釜のおとくの釜の底に火をいれ  
入るまで煮て又その上を火をいれ又か  
しこめて火をいれ煮る釜の中はと火  
をいれてそれを煮る釜をいれ煮る  
つ入火のおとくをいれ煮る釜をいれ煮る  
釜の上へ一倍の炭をいれ煮る釜をいれ煮る

れ火ふちりこの釜をいれ煮る  
煮る釜をいれ煮る釜をいれ煮る  
又煮る釜をいれ煮る釜をいれ煮る  
け煮る釜をいれ煮る釜をいれ煮る  
火をいれ煮る釜をいれ煮る釜をいれ煮る  
煮る釜をいれ煮る釜をいれ煮る  
めあつと煮る釜をいれ煮る釜をいれ煮る





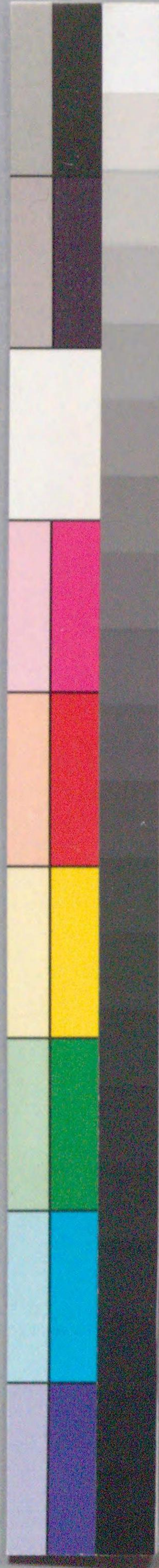
まうがひるおちりつうけの金ハ多々さわ  
 らまきやううま研べし順る究りせらちり  
 ○ 磁焼付志又志六ヶ敷子ありおれ  
 法焼付方後扁ふくわしく蒸気  
 ○ 細書焼付方後扁ふくわしく蒸気  
 べしその弁大四火鉢角重丹の類  
 またより二三尺もふやぐ焼付方あり

○ 焼おふいむるまきやまぐし扁振うら  
 こぬりま井と付べし火系をあらふ  
 ○ 釜の振の方子種くあれまもい中  
 小せとびあわまみ次子若くとして  
 磁

赤猪師南

四





拾舟著  
 三保五甲午年  
 春正月吉日  
 日此始又...  
 小冊...



208  
92

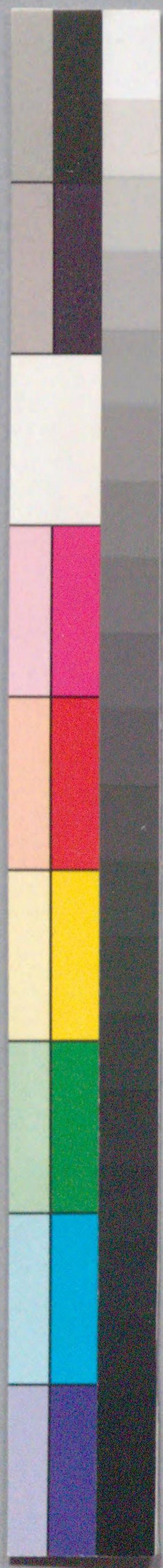
此の月子花といふ田舎草といふ草  
赤猪肝南といふ草の傍に増えたりとの  
言ふも此の草は赤猪肝といふ草は  
赤猪肝といふ草の傍に増えたりとの  
言ふも此の草は赤猪肝といふ草は  
赤猪肝といふ草の傍に増えたりとの  
言ふも此の草は赤猪肝といふ草は

甥味月



三二七

ナ五



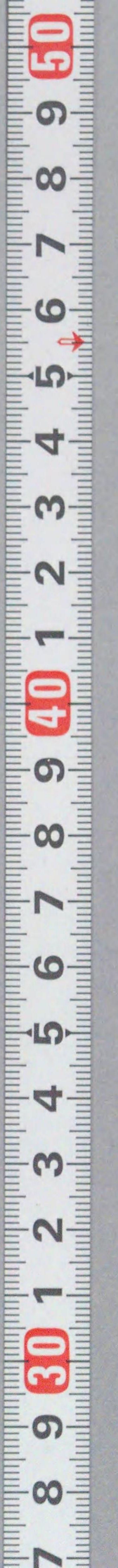




208  
92

国立国会図書館 赤絵指南 208-92

ガラス使用







国立国会図書館 赤絵指南 208-92



ガラス使用

